

# 異端審問についての一考察

関根 謙司\*

The Inquisition had been beginning towards the Cathars (derived from the Christianity in 12th century) in Languedoc in the southern France. The Inquisition was expanding also in Aragon, Castilla, Andalusia, Portugal, Mexico, Peru and India. The Inquisition have been stopping in 19th century, but even 20th century it has had a reunion in the first half of the 20th century too. Through the history of European Christian areas including to Languedoc, Aragon, and Castilla the Inquisition has been held. It is calling "Anti-Semitism" also until modern times. It has been called as the Inquisition, Pogrom or Holocaust. It shows us now also.

Key words : Inquisition, Marrano, Morisco, Cathar

## 1. はじめに

12世紀から20世紀まで南フランス、スペイン、新大陸に流布していた異端審問（英語で inquisition）はキリスト教、とくにカトリック教会の存続をかけた闘いであった。

異端審問は、南フランスに流布していた、カタリ派キリスト教との壮絶な戦いから始まった。カタリ派<sup>1)</sup>は、アルビジョワ派<sup>2)</sup>ともいわれ、南フランスのラングドック地方で勢力のあるキリスト教の一派であった。ブルガリアで生まれたボゴミール派<sup>3)</sup>に影響されて生まれたとされ、他の唯一神教と違い、ボゴミール派やカタリ派では終末論<sup>4)</sup>でなく輪廻転生<sup>5)</sup>を信仰し、カタリ派では完全者 (parfait)<sup>6)</sup>になることを至上とし、性欲を含めていっさいの欲を否定する。夫婦間の交わりも子孫を残すこと以外は避けるべきで、極端なまでの禁欲主義者であった。また、イタリア北部を中心に流布していたキリスト教改革派に対しても異端審問の対象になっていた。

一方、12世紀は南フランスのローヌ川を境に東側がプロヴァンス公国<sup>7)</sup>、西側が教皇領<sup>8)</sup>であった。時代は十字軍後期<sup>9)</sup>にあたり、キリスト教の異端派を始め、安泰のカトリック教会も修道会もベネディクト派<sup>10)</sup>ならびにその亜流だけに留まらず、教会改革運動<sup>11)</sup>も盛んだった。十字軍によって、交易が活発化するとともに<sup>12)</sup>、十字軍として戦ったイスラム教を論駁<sup>13)</sup>するのが目的であり、不可欠であった。こうして、中世ヨーロッパにおけるトーマス・アキナス (Thomas Aquinas, ca.1225-1274)<sup>14)</sup>などのスコラ哲学が確立されていったのである<sup>15)</sup>。イスラム世界との交流を通じて、中国やオリエントの新しい知識や学問が興隆した<sup>16)</sup>、まさに「12世紀ルネサンス」<sup>17)</sup>の時代であった。

## 2. 南フランスで始まった異端審問

異端審問は南フランス、とりわけカタリ派が流布していた地域から始まった。ローマ教皇の

\*人間学部コミュニケーション社会学科

命（教皇使節がラングドックで暗殺されたのを受け）でシモン・ド・モンフォール（Simon de Monfort, 1164~1175-1218）が率いるカタリ十字軍が行った弾圧・虐殺はすさまじく、ベジエ（Béziers）<sup>18</sup>、カルカソンヌ（Carcassonne）、アルビー（Albi）、トゥールーズ（Toulouse）が陥落していった。フランス王もこの機会に南フランスを完全に掌握するという野心がないでもなかった。1244年、モンセギュール（Montségur）が陥落し、カタリ派はほぼ完全に消滅した。カタリ派の拠点のみではなく、村々に浸透していたことも関係し、弾圧は壮絶を極めた。人々は逃げのび、かなりのカタリ派の人々がピレネー山脈を越えてアラゴン<sup>19</sup>に入った。

カトリック教会を守ることがアラゴン（Aragón）とカスティールヤ（Castilla）の連合王国であるスペイン王家を守ることと悟った、貴族、王家は異端審問を積極的に始めた。カタリ派がいなくなると、ユダヤ教やイスラム教からの改宗者が本物かどうか、目をひからせた。

### 3. アラゴンにおける異端審問

モンセギュールが陥落する前後からカタリ派を中心として一般の人々はピレネー山脈を越えて当時のアラゴン王国に入っていた。フランスのトゥールーズとサラゴッサ（Zaragoza）の間には山道があり、その途中にハカ（Jaca）<sup>20</sup>の町があった。ハカには多くのユダヤ教徒が住み、経済活動に従事していた。スペインがアンダルシアを入手したのは711年のことである。そして、建国したばかりの後ウマイヤの発展を支えた立役者としてユダヤ教徒の役割は多大である。かれらの商才・経済活動を支えたのはその教育力・語学力・ネットワーク<sup>21</sup>であった。

南フランスのキリスト教カタリ派に対するおぞましい弾圧行為から始まった異端審問は南フランスと隣接していたアラゴンにすぐに飛び火した。異端派への弾圧は表面的には宗教的な要因を装っているが、現実はその経済力・商業力にあった。それ故、それがアラゴンの経済を握っていたユダヤ教徒に及ぶのは時間の問題であった。

ユダヤ教徒は極めて軍事力とは無縁であった。塩を持って、戦場に馳せ参じることはあっても、武器をもつことは稀であった<sup>22</sup>。統治者にしてみれば、武器を持たせないことが安全ともいえるし、ユダヤ教徒としてみれば彼らの独特な教義・宗教を固守していく方法でもあった。

しかし、彼らにも予期しない転機が訪れた。それがアラゴン王国の王子フェルナンド（Fernando el Católico, 1452-1516）とカスティールヤ王国の女王イサベル（Isabel la Católica, 1451-1504）との婚姻であった。

### 4. カステッリヤにおける異端審問

女王イサベルはもともと控えの王女であり、王位継承権でいうと、下位にいた。しかし、男子の王位継承者が若くして亡くなったため、たまたま女王の地位が廻ってきた。イサベルはもともと熱心なカトリック教徒であり、当初、政治的野心がそれほど強いわけではなかった。

レコンキスタ（Reconquista）と呼ばれた、イベリア半島のキリスト教徒の国土回復運動はまだ完結してなかったが、何よりも豊穡なアンダルシア（Andalucía）ではイスラム教徒のナスル朝が続いていた。とくにそれまで服従の代わりに高額な税金を納めていたナスル朝がサガル（Muhammad XIII ibn Sa'd, 通称 =al-Zagar, ?-1494, 在位 =1232-1273）の出現で激変した<sup>23</sup>。敵対関係が露わになったのである。イサベルはナスル朝撲滅をスローガンに財政面をユダヤ教徒に命じた<sup>24</sup>。しかし、ユダヤ教徒のあまりにも非協力的態度にイサベルもフェルナンデスも快く思わなかった。イスラム王朝の滅亡のために最新の兵器（大砲など）を導入する必要があった。時代は明らかに火器の時代に入ろうとしていた。

イサベルはイスラム教徒をアンダルシアから追い出すことに成功し、アルハンブラ宮殿の鍵を受け取った。そこは城壁というよりは宮殿そのものだった。最後のアンダルシアのイスラム王朝であるナスル朝の王ボアブディル（西欧で Boabdil, 正式名 =Abū ṢAbd Allāh Muhammad XI, 在位 =1482-1483, 1487-1527）は、アラブ人には不運（al-

Zugābī) の王として知られる。父や叔父との抗争で知られ、最終的にはカトリック両王と協定を結んだ。ナスル朝はもともとキリスト教徒のレコンキスタの過程でハエン (Jaén) 攻略に際してキリスト教徒に協力し、その代償としてアンダルシア南部を与えられたところから始まった。その意味では始めから従属関係であったが、キリスト教徒にはナスル朝の態度に対して不満がないわけではなかった<sup>25)</sup>。

1492年1月2日の落城の前に、ポアブディルとカトリック両王が結んだ教徒はおおよそ以下のようのものであった<sup>26)</sup>。

- (1) ムスリム (イスラム教徒) の人々、町、女性、城、農地ならびにあらゆる財産の安全を保証する。
- (2) 首都グラナダに残ることを希望するムスリムは、喜捨 (al-Zakāt) と10分の1税 (al-Ushur) 以外は払うことはない。グラナダを去ることを望むことを望むムスリムは、掛け値なしでムスリムでもキリスト教徒でも同意した金額で同意した雇主に土地を売却することができる。
- (3) 北アフリカに行くことを望むムスリムは、自分が希望するイスラム国家への船に乗ることができる。この場合、3年間は船代もまた他の出費も必要としない。
- (4) グラナダに残ることを希望するムスリムは上記の範囲で安全が保障される。

グラナダ (Granada) の陥落というキリスト教世界のイスラム王朝の崩壊はローマ教皇庁の喝采・賞賛を浴びた。その報復がある意味で1534年のイスタンブール陥落であり、その後のオスマン帝国によるバルカン地域 (ギリシャ、アルバニア、ブルガリア、モンテネグロ、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、モンテネグロ、セルビア、ハンガリー) などの支配であった。

## 5. モリスコの反乱

アンダルシアではイスラム教徒のことをモリスコ (morisco), 彼らの使うアラビア文字のスペ

イン語のことをアウハミアド (aljamiado) と言った。モリスコのナスル朝の最後の王であるポアブディルがアラゴン王のフェルナンド国王とカステーリャ女王イサベル女王との間に交わした条約によると当初、モリスコたちのスペインからの追放も改宗も含まれていなかった。しかし、1502年、アルハンブラ宮殿を見渡せる対岸の高台アルバイシン地区 (Albaicín) でモリスコたちの反乱が起きた。グラナダ市内の大モスクは大カテドラルに変えられ、モリスコたちの不満は限界に達していた。争いを避け、おとなしく追放に甘んじているには特異すぎるイスラム世界であった。反乱はすぐに鎮圧されたが、その後もグラナダの南では反乱が相次いだ。とくにアルプハラでの反乱は独立国家建国の野望があり、鎮圧に苦慮した、カトリック両王の孫であり、スペイン・ハプスブルク家の黄金時代を現出させたフェリペ2世 (Felipe II, 1527-1598, 在位: 1556-1598) は鎮圧軍の指揮官に腹違いの弟で庶子のオーストリア公に命じた。アルプハラの反乱軍の指揮官はスペイン語ではアベン・フメーヤ (ユメーヤ) Abén Humeya (c.1545-1569) と言った。反乱は1568年12月に始まった<sup>27)</sup>。アベン・フメーヤの戦死後も反乱は続いた。反乱の鎮圧に時間を費やしたフェリペ2世はグラナダの南部の拠点アルメリア (Almería), アンテケーラ (Antequera), そしてロンダ (Ronda) でもモリスコに対する異端審問を始めた。グラナダでのモリスコに対する異端審問は1526年に始まっていたが、ロンダの異端審問は1566年に始まった<sup>28)</sup>。ロンダはクレパスによって分断されている特異な地形でイスラム時代から王たちの避難場所であった。その地形な特殊性が近世、モリスコだけではなく、カルメン (Carmen [小説の創造的主人公]) で有名なバンデレリョ (Banderello) と呼ばれた盗賊たちの拠点としてしばしば襲撃を繰り返していた。

## 6. マッラーノと異端審問

グラナダ陥落直後、カトリック両王は悪名高き「ユダヤ教徒追放令」を発令した。それはキリスト教徒に改宗しない者はスペインを出ていけとい

うもので、期限は1492年3月31日とした<sup>29)</sup>。このとき、多くのユダヤ教徒は改宗するよりも、ポルトガル、フランス、イギリス、またスペインから独立したばかりのオランダ＝ベルギー（フランドル地方）などに逃れ<sup>30)</sup>、その一方で改宗したユダヤ人に対しては本当にユダヤ教を捨てていないかの「異端審問」が始まった。隠れユダヤ教徒はマッラーノ（豚野郎）<sup>31)</sup>と呼ばれ、彼らの使用しようするヘブライ文字のスペイン語をジュデオ・アラビア語（Judeo Arabic）、スペイン語をヘブライ文字で記述した言語をラディノ（Ladino）と呼んだ。マッラーノたちは、外見は教会であっても内部はシナゴーク（ユダヤ教会）であったこともあり、発見されれば「魂の浄化」を口実に火刑（あるいは家ごと放火）が待っていた<sup>32)</sup>。異端審問の様子は文献や絵画（その代表的な絵画はマドリッド（Madrid）のプラド美術館に収められている）などで描かれている。

以下、1492年6月4日のアンダルシアのコルドバ（Córdoba）の異端審問<sup>33)</sup>についての近世スペイン語（といってもほとんど正字法の違いであるが）の記録である。以下にその要約を紹介する。

Don Fernando e doña Ysabel, etc., a Vos el Reuerendo que tiene o touiere la adminstración Abtoridad e Juresdición eclesyastics de la Yglesia e diocesis de la çibdad de Almeria. Salud e gracia. Por quanto asy por Bula des nuestro muy Santo Padre Ynoçencio, Papa octauro, como por derecho partenesçe a nos, como a patronos de la dicha yglesia Cathedral de Almeria, la presentación a las dignidades, canongias, raçiones e otros benefiços della, por la aver nueuamente ganado de los moros, enemigos de nuestra Santa Fee Catholica, por ende, por esta nuestra carta, vos presentamos a Diego Luzero, Bachiller en Decretos, para que ynstituyays en la maestrescolia de ka ducha Yglesia de Almeria, que está vaca, e le proueyays della, a asy ynstituido e proueydo por vos, por la presente mandamos que le seadada la posesyon vel casy della, con todas sus preheminençias e prerrogatiuas, e que le sea recidido con todos los dezmos, frutos e rentas e derecho a ella pertenesçientes. Dada en la muy noble çibdad de Córdoua, a quatro dias del mes de Junyo, año

del nascimiento de nuestro señor lhexucripto de mill quatroçientos nouenta y dos años. Yo el Rey, -Yo la Reina- Yo Fernanndo Aluarez de Toledo su secretario del Rey e la Reyna, nuestros señores, la fiz escreuir por su mandado.<sup>34)</sup>

（ドン・フェルナンド様とドーニャ・イサベル様などはあなた方を無法なる統治と教会の法的正当性を強制したり、行使したりしている。そして、アルメリアのわれらの偉大なる聖パドレ・イノセンシオ教皇の勅令を通じて、われらの憲章やあなた方のディエゴ・ロセロやデクレトスのパチレルを通じて、アルメリア市の司教区がもたらしてくれるアルメリアの大聖堂の庇護者の尊厳、聖書の正典、毎日の糧、恩恵と罪過、またカトリック教会の祭典に敵対しているモーロ人〔訳注＝モリスコのこと〕がもたらす悪運をかわすことによって、アルメリア教会の水場〔訳注＝イスラム教徒のモスクはそのまま教会になり、当時のウドーの場所も残ったと思われる〕や神学教師を通じたりして、コルドバにあるようなすばらしい物、建物をわれらにもたらしてくれた。祝福あれ。また、その建物は飛び飛びで4日かけて、あるいは2年の歳月と400の石垣を作るのに錐を使って出来上がったものでもある。トレードにいるフェルナンド・アルアレスこと私フェルナンドと女王陛下がここに判断を下すものである。）

コルドバの異端審問はナポレオン軍の侵入で大きな変化が生じた。フランス革命の理想を夢見たナポレオン（Napoléon Bonaparte, 1769–1821）が異端審問については疑惑的であった。1808年6月7日、ナポレオン軍はスペインに侵入、同年12月4日にはマドリッド近郊のチャマルティン（Chamartín）に到達している。ナポレオンの失脚後の1814年にフランス革命の洗礼を受けたスペインは異端審問について新段階に突入した。

版画<sup>35)</sup>にも当時の報道写真の代用であったかのようにすばやくスケッチ画が描かれてきた。いまでも、サラゴッサのゴヤ特別展の会場でゴヤの描いたスケッチから印刷された版画のすばらしさを鮮明に覚えている。

異端審問はスペインとその支配地では19世紀末まで続いた。以下は1819年10月30日のコル

ドバでの記録である。

En 7 foxas útil, remitimos a V.A. La relacion de las causas de fee pendientes en este Tribunal, que há formao y puestro él, para el efecto, nuestro collega en Ynquisidor Fiscal, virtud de lo resuelto por V.A. en 25 de Sptiembre anterior, advirtiendо que no lo ha ejecutado antes de aora por no tenar noticia de ello, supuesto que las acordadas antiuas se extraviaron en la revolucion pasada; Meiya con la citada orden, queda instruido en hacero de 4, quatro mesess, como esa Superiodidad manada.

Dios guarde a V.A. muchos años. Ynquisició Córdoba 30 de octubre de 1819.

Doctor Don Jseph Casal, Dr. D. Francisco Pelaez de Campomanes.

(7 拍子の如く早々とバレンシア地区の異端審問の裁判所で行われた未解決の事件として、異端審問官の捜査の結果、去る9月25日に結審された。これによって被告は追い詰められ、行き場をなくして困惑したと思われる。4日4晩かかった決定だった。永久に神の祝福があらんことを願う。

1819年10月30日、コルドバの異端審問所。医師ドン・イセフ・カサルならびに地区裁判官フランシス・ベラエス。)

19世紀半ば、スペインでは最後の異端審問の悲惨な歴史が残っている。有名なところではセゴビアでキリスト教会が実はユダヤ教会であったことが発見され、信者とともに建物が燃やされた<sup>36)</sup>。セゴビアは子豚の丸焼きで有名だが、それも異端審問の調査として利用されていたと考えられる。それでも、トレードの(今日、博物館として残っている)2つのユダヤ教会のように数世紀にかかって異端審問の抜き打ち調査をかわしてきたユダヤ教会(シナゴグ)もある<sup>37)</sup>。

19世紀中葉、ヨーロッパやアメリカに拠点をもっていたロスチャイルド商会がマドリードに支店を設けることになった。当時、ロンドンのロスチャイルド家の出身のサー・アンソニー・ロスチャイルド(Sir Anthony Rothschild, 1810-1884)<sup>38)</sup>は下院議員であり、ユダヤ社会の回復に熱心な彼はスペイン政府がマドリード支店に懸命

なのを見てその代償に悪名高きスペインの「ユダヤ教徒追放令」と「異端審問」の停止を求めた。当時、世界一の大国であり、最大の強国の要求に対して、スペインは「ユダヤ教徒追放令」と「異端審問」の停止を決定した。最後の異端審問は1834年とされる<sup>39)</sup>。

「ユダヤ教徒追放令」と「異端審問」の停止を受けて、ユダヤ教徒、ユダヤ人がスペインに戻ってきた<sup>40)</sup>。数百年ぶりに目にする祖国であった。

ユダヤ社会にとっての異端審問自体は1233年、グレゴリオ9世によって始められた。ラテン語で inquisitores dati ab ecclesia といい、スペインのユダヤ教徒たちはもっぱら Auto-da-fé と呼んだ<sup>41)</sup>。

## 7. 新大陸における異端審問

異端審問はスペインではどこでも見られた<sup>42)</sup>。彼らはカスティリヤとアラゴンの連合王国のスペインのカトリック両王によるユダヤ教徒追放令はそう長くは続かないと思っていた隠れユダヤ教徒(彼らはマッラーノ=豚野郎)と呼ばれた<sup>43)</sup>。それに対し、隠れイスラム教徒たちはモリスコと呼ばれた<sup>44)</sup>。

とくに異端審問が激しさを増してくると、マッラーノたちはスペインを捨て、新大陸(とくにメキシコ、ペルー、インド)を目指した。しかし、異端審問は新大陸でも彼らを襲った。

メキシコ<sup>45)</sup>は特にユダヤ教徒が逃れた地域として有名である。20世紀になっても、ウクライナ出身の裕福なユダヤ人<sup>47)</sup>出身のレフ・ダヴィードヴィチ・トロッキー(Лев Давидович Троцкий, 1879-1940)だからこそ、貧しい農家出身のグルジア出身のヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ・スターリン(Иосиф Виссарионович Сталин, 1878-1953)の放った人物に暗殺されたのである。

ペルー<sup>46)</sup>はスペインの植民地時代、新大陸進出の拠点であった。スペインからの植民者が先住民を酷使したため、労働力不足を招き、アフリカなどから安価な奴隷を輸入した。奴隷貿易は1980年まで続いた。それに先立ち、スペイン、ポルトガルの植民地のいくつかの地域で奴隷制が廃止されたのに続き、1888年にはブラジルでも

公には廃止された。それでも、20世紀初頭には大西洋で最後と思われる奴隷船が目撃されている。

新大陸の奴隷は鉱山などの危険な作業で不可欠の存在であった。そして、その現場責任者にはマッラーノやモリスコが少なくなかったことは歴史の皮肉であった。自分たちの信仰を守るため、黒人たちの自由と生命を奪ったのである。

異端審問はアフリカの黒人奴隷にも見られた。メキシコなどよりも早くから見られた。もともとメキシコの異端審問も1610年に、たまたまドン・アントニオ・デ・サアベドラ（Don Antonio de Saavedra）の黒人奴隷であったコンゴ出身のマリア・ブランカ（Maria Blanca）がメキシコ・シティーに連れて来られたのを契機に始まった。

## 8. プロテスタントに対する異端審問

現在、カトリック国と知られるスペイン、ポルトガル、イタリアでも1540年代から1570年代にかけて、プロテスタントは飛躍的に波及していった（イタリアでは1580年代まで続いたといわれる）。プロテスタントの創始者の1人が逃れた国として知られるカルバン〔Jean Calvin, 1509–1564〕やツィングリ〔Huldrych Zwingli, 1484–1531〕が尽力したスイスやドイツ（マルティン・ルター〔Martin Luther, 1483–1646〕を生んだ）ではもちろんのことである<sup>48)</sup>。とくに中国から入った印刷術はヨーロッパでローマ字に改良され、プロテスタントを活気づけた。すでにルターはグーテンブルク〔Johannes Gensfleisch zur Laden zum Gutenberg, ca.1398–1468〕によってヨーロッパで最初の印刷術が完成したことは影響は少ない。ローマ教皇庁の指導がなくても聖書があれば十分であるという考えだ。1567年にはセビリヤでラテン語の聖書が刊行され、またたくまにヨーロッパの数か国語に翻訳された<sup>49)</sup>。異端審問に対しては批判的な意見が相次いだ。イギリスの詩人・文学者にしてオリバー・クロムウェル〔Oliver Cromwell, 1599–1658〕の支持者ミルトン〔John Milton, 1608–1674〕もその一人である<sup>50)</sup>。しかし、カトリック国での異端審問はますます激しくなっていたことは今日、残されている絵画や銅版画な

どから明らかである<sup>51)</sup>。

## 9. インドの異端審問

大航海時代、ヨーロッパ人にとっては香辛料やスパイスの宝庫であるインドが長らく願望の地であった。インド航路を開拓したヴァスコ・ダ・ガマ（Vasco da Gama, [1460–1524]）はヨーロッパ人として初めてインド航路を開発したイスラム世界の航海士を拉致し、拷問した結果、インドへの航路を知ったのは事実であるが、それまで破格の価格であった、肉料理などにはかかせない香辛料をやっと適切な価格で入手できるようになったのである<sup>52)</sup>。

ポルトガルはどこよりもいち早く大洋に乗り出した。ポルトガル人はいつもスペイン人の圧力と介入に悩まされてきた。スペインがカタロニアの反乱に手をやき、ポルトガルに支援を求めてきたチャンスにその機会を逃さず、やっと独立を達成したわけである。フランスのブルゴーニュから来たブラガンサ家の王朝（Dinastia de Bragança）<sup>53)</sup>はそのなかでも勢力をのびし、王家に躍進した。インドに進出したポルトガルはゴヤ（Goya）にポルトガルの拠点を作った。インドには10世紀以前からヨーロッパからのユダヤ商人（彼らはラダック地方に住んでいたためラダック人と呼ばれた）が渡来しており、商業活動が活発だった。香辛料の大規模プランテーション農場を開拓する一方、インドにおける活動拠点にゴヤを置いた。ポルトガルの吸収、合併に熱心だったスペインは本国からイエズス会の宣教師のフランシスコ・ザビエル（Francisco de Xavier, ca.1506–1552）が来航すると、新局面を迎えた。ザビエルはイエズス会の創始者として知られ、同じ創始者でもあるイグナチオ・デ・ロヨラ（Ignacio López de Loyola, 1491–1556）の秘書官で、ともにバスク人であった。彼らはプロテスタントの躍進を還り見ながら、カトリック教会にも批判的で、教皇に忠誠を誓う一方、海外布教に乗り出した。

その一方で、国内ではスペインのようなユダヤ追放令に続く異端審問には当初、懐疑的であった。ポルトガルのマニエル1世（Manuel I,

1469-1521, [在位 = 1495-1521]) の治世下でそれなりの優遇をうけていたマッラーノだが、リスボンでプロテスタントならびにマッラーノとカトリックとの間に衝突がおきた。カトリック教徒を扇動した修道士は火刑になり、他の首謀者は処罰された。

王の死後の 1536 年、ローマ教皇の認可を受けてスペインにならって異端審問所が設立された<sup>54)</sup>。そして、1540 年、ポルトガルの異端審問所で最初の火刑が執行され、そして、1765 年までの間に少なくとも 1175 人の火刑が執行されたのである<sup>55)</sup>。

異端審問所を設立するにあたり、ザビエルがポルトガル王ジョアン 3 世 (João III, 1502-1557, [在位 = 1521-1557]) に助言したことが大きく関係している。

海外布教の命を受けて、1541 年、ザビエルはリスボンからポルトガル人の多く住むゴアに向けて出発した。

イエズス会の海外布教の歴史<sup>56)</sup>の中で、ザビエルにとってはゴアが特別の意味を持っている。日本からゴアの情報収集のためインドを中継して中国にわたり、病死したザビエルの遺骨はゴアの聖パウロ聖堂に移送された。

それにしても、ザビエルについて現代の商況的視点でいうならば、ポルトガルの植民地支配を支え、異端審問を進め、「天国が約束されているならば、奴隷として連行してもいい」という考えだろう。死後、5 年以上もたったとき、ザビエルの遺体の一部が何者かに切断された。すると、生きていたかのように生き生きとした血が流れたという。聖人ザビエルの誕生である。たしかに、キリシタンになった日本人の一人をゴアに連れていき、当地の神学校に入学させている。その落差にただただ啞然とするだけである。

## 10. もう 1 つの異端審問—焚書

火刑にはならなくても、古代オリエントやギリシャ・ローマ、中国などで古くから焚書が行われてきた。多くの場合、当事者は追放あるいはその地から逃亡を余儀なくされた。また、戦火のため

図書館が燃やされることも少なくなかった。本はたとえ写本でも手書きのコピーが作成され、流布し、人々に混乱を与えることが当事者に危惧されたからである。それによって、失われた書物はすくなくないが、写本のコピーのお陰で救われたものも多い<sup>57)</sup>。

異端審問に関していうと、カトリック世界では 13 世紀以降、異端審問所が設立され、また始まったとされる。1252 年、教皇インノケンティウス 4 世は教会の擁護と異端者の処罰を目的にドミニコ修道会とフランチェスコ修道会からそれぞれ異端審問官を選ばせ、異端者の逮捕、拷問、裁判を委ねた。ドミニコ会修道士だったベルナル・ギー (Bernard Gui, 1261/1262-1331) は異端審問官のマニュアルともいえる『異端審問官提要』(Bernardus Guidonis, *Practica inquisitionis*, ca.1323) を著した<sup>58)</sup>。ギーはアルビジョワ十字軍の指揮官のシモン・ド・モンフォール (Simon de Monfort) とともに同行 (あるいは別行動もあったと思われる) した異端審問官として恐れられ、カタリ派の鎮圧のあとにはもっぱら対カタリ派の異端審問をカルカソンヌとトゥールーズで行い、930 人の異端審問に関わり、うち 42 名を火刑、307 人は流刑に処したとされている (これについては異説もある)。1559 年、教皇パウロ 4 世は『禁書目録』を作成させ、パリ、ルーヴェン、ルッカ、シエナ、ヴェネツィアで刊行した。これはもっぱらマッラーノあるいはカトリックの教義に相いれない神学者や聖職者を摘発させるために作成された。とくに 1583 年ごろにサラマンカで刊行された『禁書目録』は詳細で懇切丁寧であった。とくにレコンキスタが完了した 1492 年以降、マッラーノやモリスコの摘発はもちろんのこと、とくに金融業に多いマッラーノを処罰すれば教皇を含めて多くのカトリック信者からの借金を帳消しにできると考えた<sup>59)</sup>。

焚書による異端審問は新大陸にも波及した。ペルー、メキシコ、ベネズエラなどで禁書に基づいて異端審問が行われたが、コロンビアでは焚書の記録や風刺画が発見され、焼却処分を受けている<sup>60)</sup>。

この流れを一時的に止めたのはフランス革命の

洗礼を受けたナポレオン・ボナパルト（Napoléon Bonaparte, 1769-1821）の出現であり、ナポレオンの親族が各地の国王の代行を担った。ナポレオン・ボナパルトの失脚後、スペインでは一時的に閉鎖されていた異端審問所が復活したが、1834年に廃止されている<sup>61)</sup>。

イギリスでも焚書による異端審問が見られた<sup>62)</sup>。1515年、オクスフォード大学のティンダル（William Tyndale [1494/1495-1536]）は聖書を始めて原典（ヘブライ語、アラム語、ギリシャ語）から英語に翻訳した。ヨーロッパ各地に逃亡しながら翻訳を完成させたが、1636年、逮捕され、ブリュッセル近郊で処刑された。しかし、ティンダルの訳書は密かにイングランドに持ち込まれたが、摘発され、大半が焚書された<sup>63)</sup>。

20世紀になっても焚書、異端審問はときおり見られた。スペインのフランコ時代、ドイツのナチス時代、旧ソ連時代、アルゼンチンの軍事政権時代などが代表的なものである。そして、ときおりアンチ・セミティズム<sup>64)</sup>を見せるのが、カトリック、プロテスタントを問わず、共通していることも特徴的である。かつてユダヤ系の詩人のハインリッヒ・ハイネ（Heinrich Heine, 1797-1856）は「本を燃やす人間はやがて人間も燃やすようになる」と書いたのは極めて予言的である。

## 11. 他宗教に改宗していないことの証明するための異端審問所

15世紀以降、西欧カトリック世界とイスラム世界はしばしば対立し、ときには戦争を繰り返した。そのため、アルジェリアを拠点に海賊行為を繰り返した。（同じ海賊でも彼らは英語でパイレーツ [Pirates] ではなく、コルセア [Corsairs]<sup>65)</sup>と呼ばれた。もっぱら標的にされたのは、スペイン戦とローマ教皇の船舶であった。彼らはバリバリア海賊と呼ばれ、地中海の各所で海賊行為を行ったが、それはスペインや教皇領も同様であり、マルタ騎士団はほとんどそのために雇われた海賊であったともいえる。

『ドン・キホーテ』（Don Quijote de la Mancha,

1605）の著者セルバンテス（Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616）はレパントの海戦（Lepanto, 1571）に参戦し、オスマン軍と戦い、左足を失った。その後も従軍し、バリバリア海賊に捕らえられ、交渉が難航しながら4年後にキリスト教団体の斡旋により本国スペインに戻った。モリスコが主体のバリバリア海賊に囚われていた人物は異端審問を受けてカトリックを捨てていないことが必要であった（カトリック教会では教区によって厳密に管理されており、教会税も教区に支払う必要がある。教区の管理以内にはないと結婚も埋葬もままならない）。そのときの体験から『ドン・キホーテ』にもキリスト教徒の信者である許可をもらうため、「改宗者は、わが身に大事なことの届出でをすっかりすませたので、いよいよ異端審問に請願してキリスト教会の信徒団に復帰する許可をもらうために、グラナダ（ママ）に発足しましたし、自由をえましたほかのキリスト教徒たちも、それぞれ向かいたいほうメインに立っていきました。」（永田寛定訳）（原文 =Seis dias estuvimos, en Veléz, al cabo de la cuales, el rebegado, hecha su información de cuanto le convenía, se fué a la ciudad de Granada a reducirse por medio de la Santa Inquisición al gremio santísimo de la Ingldsia;）と言わせている<sup>66)</sup>。

現在、スペインの教会のあちこちには教会に鎖が垂れ下がっているのをしばしば見かける。また、モロッコにはキリスト教徒が収監された地下牢が残っている。アルハンブラ宮殿の落城とその後の反乱でモロッコに逃れたモリスコたちは多数おり、彼らから言わせれば豊かなアンダルシアを追い出された「聖戦」でもあった。ルネサンス時代の画家のアンドレア・デル・サルト（Andrea del Sarto, 1486-1531）やフィリポ・リッピ（Fra Filippi Lippi, 1406-1469）が海賊に捕らえていたという口実で（真偽のほどはともかく）10年近く、友人からの借金を無視していたのは有名である<sup>67)</sup>。

また、アルハンブラの落城の日、父に連れられて雪の降るグラナダを去ったレオ・アフリカヌス（Leo Africanus, 1483?-1555?）は、その後、各地を転々したが、キリスト教徒のシチリアの海賊

に捕われ、ローマ教皇に奴隷として差し出された。ローマでカトリックに改宗し、当地で『アフリカの描写』を口述筆記し、西欧世界に北アフリカ、マリ、トンブクトゥなどのイスラム世界の現況を伝えた。トンブクトゥを黄金の都として紹介したのは、レオ・アフリカヌス<sup>68)</sup>であり、長らくカトリック世界に伝説を残した。

## 12. 結語にかえて

異端審問はとくにカトリック社会の汚点として、南フランス、アラゴン、カスティリヤ、さらには連合王国としてのスペインの支配下に置かれたポルトガルで12世紀から19世紀末まで続いた(異端審問の中止はマドリッドにロスチャイルド商会の支店が設けられ、当時イギリスの下院議員だったロスチャイルドが数世紀続いたユダヤ教徒追放令の撤回を求めたためである)。20世紀になってスペインのホロコーストとして記憶されている<sup>69)</sup>。

ヒトラー側とフランコ側のそれぞれの側近の下工作の結果、1940年10月20日、フランス国境の近くでヒトラー総統とフランコ総統は対談したヒトラー(Adolf Hitler, 1889-1945)はゲルニカ村などを空爆してフランコを助けた経緯がある。これに対し、フランコはスペインの中立を説明しながら、食料の援助は約束した。ただし、食料の販売は連合国にも行っていた。フランコ総統(Francisco Franco Bahamonde, 1892-1975)がいかにヨーロッパを信じていなかったかはスペインとロシアだけがレール幅が西欧の広軌ではなく、より広くして簡単に行き来できなくさせていることから伺える<sup>70)</sup>。しかし、これを口実としたのか、フランコはユダヤ人追放令の解除はなかったのごとく、戻ってきたスペインのユダヤ人を弾圧した。その一方で、スペインの鉄道の軌道幅を広くし、容易にフランスの国境を越えることができないようにした<sup>71)</sup>。

スペインが1492年、ユダヤ教徒追放令を発令したことはスペインのその後の経済活動を停止させたことはほぼ間違いなく、スペインの公立中学校でも「スペインの歴史の最大の違い」と教え

ている<sup>72)</sup>。

19世紀、極めて世俗的な皇帝であり、フランス革命の理念を受け継いだナポレオン一世は異端審問に異議を唱え、その後もあとに続いた。そして、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世は2000年に大司教 Roger Etchegarey を通じて歴史神学委員会の決定(1998/10/29-30)を受けて2000年祭(400年に一度だけ閏年のある年)のために声明を発令した。以下はその要約である<sup>73)</sup>。

1. He recibido con vivo aprecio el volume que recoge las 《Actas》 del simposio internacional sobre la Inquisición, organizado en el Vaticano entre los días 29 y 31 octubre de 1998 por la Comisión histórico-teológica del Comité para el gran jubileo de año 2000.

(2000年の大聖年(訳注:2000年は400年に一度の閏年がある年である。グレゴリオ暦では西暦年数が4で割り切れても、100で割り切れないと閏年ではない。ただし、400で割り切れれば閏年である。)のために歴史神学委員会によって、1998年10月29日~31日にかけてヴァチカンの下部組織である。異端審問の国際シンポジウムが開かれ、そこで議事録に採択された。)

このシンポジウムでは「異端審問」はカトリック教会の汚点として正式に声明しているのが窺える。人間は自分たちの生活、価値観、信仰などに異質のものは排除しがちである。とくに唯一神教のように政治や経済・交易と深く関連している場合はなおさらである。

異端審問はカトリック巨魁離れを防ぐ教皇庁ならびに地区の教会の要求に応えたものであり、近世になって猛威を振ったのもプロテスタントに対する防衛策であった。

今日、唯一神教(キリスト教、イスラム教、ユダヤ教)が世界をリードするとともに、神が求める世界や生き方を来世のためにも現実の世界で実現しようとする衝突の結果だといえなくもない。「宗教の普遍率<sup>74)</sup>」が説かれる一方で、紛争も少なくないのはそのためである。

異端審問はわれわれに宗教の多様性と共存の難

しさを訴えているように思える。異端者との婚姻はロシアのポグロム（*погром*）やナチスのホロコースト（*Holocaust*）<sup>75</sup>を喚起させるものがあり、形を変えて今日も存続されていることを教えてくれる。西欧キリスト教世界の対ユダヤ教徒・ユダヤ人対策やイスラム教徒との紛争がそのまま現代まで存在していると言わざるを得ない。

その意味で、「異端審問」は時間的にも地理的にも現在にも存在していると言わざるとえないのである。

### 付記

本文中の地名、人名は基本的に使用されている地域をフランス語、スペイン語、アラビア語、ドイツ語、ポルトガル語などでそれぞれ表記した。

### 追記

私事ながら、大学の紀要に投稿するのはこれが最後になると思うと、感慨深いものがある。30年にわたり、海外で異端審問の文献を集めた結果をここに上梓できることを喜びたい。

### 注

- 1) カタリ派の研究書としては、大部な同じ著者による4冊本（Perin社、1994）と2冊本（Provat社、1970）が定番であるといえる。Michel Roquebert, *L'Épopée cathare* がそれである。日本語訳としてはその簡略版といえる、武藤剛史訳『異端カタリ派の歴史』（講談社、2016）がある。ただし、この本のフランス語のタイトルは内容は同一で、*Hisoire des cathares*（Perin, 1999, 2002）である。
- 2) アウビジョワ派とはラングドック地方の地方都市アルビーに由来する。ちなみにカタリの4姉妹と呼ばれたのは、カルカソンヌ、ベジエ、フォワ、トゥールーズである。
- 3) ボゴミール派については、ユーリー・ストヤノフ著、三浦清美訳『ヨーロッパ異端の源流—カタリ派とボゴミール派』、平凡社、2001、214–220頁参照。
- 4) 世界的に宗教が生まれた理由は2つある。1つは「人はどこから来て、どこに行くのか？」つ

まり、生前どうであって死後どうなるのか？もう1つが人の能力ではなすべがない大自然の力。火山、地震、天災などがそれにあたる。その回答として、仏教、バラモン・ヒンズー教などでは輪廻転生、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の各宗派の大半では終末論を信じた。

- 5) 死後、人の魂は残り、肉体は滅びると説いたのが、バラモン教、ヒンズー教、仏教などの輪廻転生である。
- 6) カタリの最高高位で指導者。
- 7) フランク王国の壊滅後、フランスはさらに分裂し、主としてプロバンス（南フランス）とイール・ド・フランス（北フランス）に分裂した。
- 8) ローマ教皇領はヨーロッパ各地に飛び地が拡散していた。
- 9) 十字軍後期という明確な時代区分はない。ここでは第6, 7, 8回十字軍を指す。
- 10) カトリック社会で最初の修道会で、人里離れて住む黙想修道会の模範となった。「祈り、働け」をモットーにした創始者の聖ベネディクトの戒律はその後の修道会に大きな影響を与えた。『聖ベネディクトゥスの戒律』、M. ミード編著、松岡万亀雄訳『人類学者ルース・ベネディクトーその肖像と作品』、社会思想社、1977、参照。
- 11) シトー会、フランチェスコ会、ドミニコ会など。ベルナル会など。以下、中世ヨーロッパの教会・修道会の歴史については、ジェフリー・バラクラフ、上智大学中世思想研究所監修・別宮貞徳訳『図説キリスト教文化史』（原書房、1993）による。なお、このうち、シトー会は黙想系とはいえ、厳格な規律で知られている。『シトー会修道会』。
- 12) 十字軍によって西欧世界は初めて交易（とくに科学知識に基ずく物資）を体験していった。ただし、アナル派の歴史学者が指摘しているように、十字軍がイスラム世界から持ち込んだ野菜・果物はそれほど多くなく、ザクロくらいという指摘もある。なお、カトリック教会の改革に取り組んでいた聖ベルナル（St. Bernard, ラテン語では Bernardus Claraevallensis, フランス語では ernard de Clairvaux, 1090–1153）は異端カタリ派に共感しつつ、カトリック教会の改革の立場から、彼らの輪廻転生には批判的であった。

- 13) スコラ哲学全般についてはここではとくに触れないが、その後のスコラ哲学を教える神学校、大学神学部などでは「レクツィオ」（読解）、「ディスプタツィオ」（討議）、「クォドリベタル」（自由討議）の3つを重視していた。
- 14) 中世キリスト教社会を代表するスコラ哲学者トーマス・アキナス（1225?–1274）はもっぱら十字軍で闘ったイスラム教徒を論駁するために著作に埋没した。彼が精力を注いだのは『神学大全』（*Summæ Theologicæ*）ではなく、異教徒を論駁するための著書であった。その著書（ラテン語でというタイトルで書かれた）を著者はヴァチカンの近くの書店で見ることがあったが、入手しなかったのがいまになって残念である。トーマス・アキナスについては、主として <https://www.iep.utm.edu/aquinas/> (2019年6月8日閲覧) による。なお、トーマス・アキナスの著作の抄訳の日本語訳、中世ラテン語原文は稲垣良演『トーマス・アキナスの知恵』（知泉書館、2015）が便利である。彼の対イスラム教徒論（『対異教徒大全 [Polemic]』）も取められている。
- 15) キリスト教はローマ帝国から公認され、国教になる以前、数世紀にわたる弾圧を経験した。コンスタンティヌス帝はローマ帝国の維持のためにもっとも便利なアタナシウス派をローマ帝国の公認宗教に定め、アリウス派などの他の宗派は異端として弾圧した。中世のスコラ哲学が何よりもカトリック教会の存続をかけた理論武装だったのである。
- 16) イスラム文化が古代ギリシャ、古代インド、中国などの地域のさまざまな学問を吸収し、東西の文化を合体・新発見をしたことはよく知られている。
- 17) たとえば、チャールズ・ホーマー・ハスキンス、別宮貞徳他訳『十二世紀のルネサンス—ヨーロッパの目覚め』（講談社、2017）、伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』（講談社、2006）参照。
- 18) たとえば、ベジエの高台の教会に逃げ込んでカタリ派を含むすべての人々に対し、指揮のシモン・ド・モンフォール（Simon de Monfort, 1208–1265）は部下に「殺せ。神はカトリック教徒とカタリ派の人々を見分けるはずだ（*Cœ eos. Novit emir Donimno qui sunt eius.*）」と言わせたのは有名である。cf. Jacques Borliot, *Les Croisade contre les Albigois vue par Cèzar de Heisterbach*, Portet-sur-Garonne, Loubatière, 1994.
- 19) 小国のアラゴンはフランスとカスティリアの間に挟まれ、苦悶していた。アラゴン王家は双方と婚姻関係を結ぶとともに、経済活動の支援に積極的であり、その一環でフェルディナンドは付き人と愛人といっしょに（愛人だけはイサベル王女に会うときはカスティリアの別宅に残した。二人の間にはすでに子供もあり、幼少期になると大司教の座を与えた。）二人が婚姻関係となり、イサベルが女王になるとアラゴンはカスティリアと合併し、それぞれ国王と女王を自称した（フェルディナンドはまだアラゴンの王位継承者であって、国王ではなかった）。しかし、この合併がカスティリアの優勢の立場を維持していたことは、今日、グラナダの中心街の通りに残る二人の銅像からフェルディナンドがイサベルに跪いていることから伺える。
- 20) ピレネー山脈を越える山道の町ハカ（Jaca）はユダヤ教徒が多く住む町として有名であった。ハカはのちに隠れユダヤ教徒の住む地域としても有名になる。cf. Miuél Angel Motis Dorader, *La Aljama Judía de Jaca en el Siglo XV* (Jaca, 1984) アラゴンはフェルディナンド王子のとき、カスティリアのイサベル女王と婚姻関係を結び、カトリック両王の繁栄期を現出した。グラナダ陥落後、両王が布告した「ユダヤ教徒追放令」（1492）、そしてグラナダのアルバイシン地区の蜂起を機に発令された「イスラム教徒追放令」（1501）によって、スペインの異端審問はエスカレートしていった。これが19世紀末まで続きスペインの異端審問の始まりであった。
- 21) ユダヤ社会では幼少期のときから子供たちをコミュニティの寄付などによりミドラシュに通わせた。そこでは「トーラ」（「旧約聖書」と「ハルハ・タルムード」）がそれぞれ内典トーラ、外典トーラとしてヘブライ語・アラム語で教えられ、大半の子供たちがユダヤ社会のリンガ・フランカを学び、教えられた。遠方のユダヤ社会に交易に行くことができた。これらのことがユダヤ社会の経済活動を支えたのである。また、

はるばる遠方から来たユダヤ教徒と婚姻関係を結ぶことができた。それがまた近親婚を避ける方法でもあった。なお、ユダヤ社会では女性は生まれながらのユダヤ教である必要があるが、男性は一定の儀式（その中にはカウシエルを守ることはもちろんのこと、男性の割礼を義務付けている）を得て改宗することができた。上田和夫『ユダヤ人』（講談社、1986）参照。

- 22) モロッコなどの北アフリカのユダヤ教徒移住区は通常、メッラーフ (Melláh) と呼ばれる。メッラーフとは一般的には「塩」の意味があり、戦うことを「旧約聖書」や「タルムード」の教えで良しとしなかったユダヤ教徒たちは代わりに戦場に塩をもって馳せ参じた。戦場で戦死した、味方の兵士たちの首をしばしば暑い中、塩漬けにして持ち帰るためであった。
- 23) 関根謙司「西欧におけるポアブディル考」（『文京女子大学論集』、文京女子大学経営学部、Volume 6, Num-ber 1 所収）参考のこと。
- 24) このときのユダヤ団体の金額はイサベル女王にとってはあまりにも少額であり、またユダヤ教徒がイスラム教徒とは裏で関係していたことも大きかった。
- 25) ナスル朝については、もっぱら L.P.Harvey, *Islamic Spain 1250-1500*, Chicago, 1950, Rachel Arié, *L'Espagne musulmane au temps des Nasrides (1232-1492)*, Paris, 1990 を参照した。
- 26) L.P.Harvey, *op.cit.*, p.314, al-Maqqāri, Nafh al-Tib, Cairo, 1949. ただしこれについては、Harvey は al-Maqqāri が一体どの公文書を使用したか不明であると指摘している。このときの協定は全部で 27 項目が確認されており、宗教の混在を確認していたが、イスラム教徒の反乱があったとき、協定はどうか、明言していない。こらがのちに大きな問題になる。なお、Sulaymān Dhūl Wizāratayn の *Nubādāt al-ʿAṣr fi Akhbār Bnū Nasr* には末尾の部分が含まれていないとされる。キリスト教徒側の一次資料としては、Atienza M. Garrido, *La capitulaciones para la entrega de Granada*, Granada, 1910 があるとされており、1992 年のレコンキスタ後 500 年を記念して、本書の復刻版がスペインで刊行されている。現在、部分とはいえ PDF によるデータ

がネットで配布されており、筆者はこれを用いた。 <http://www.cervantesvirtual.com/downloadPdf/las-capitulaciones-para-la-entrega-de-granada-0/> (2019 年 8 月 15 日取得)

- 27) 詳細は、José Angel Tapia Garrido, *Historia de la Baja Alpujarra*, Almeria, 1989, p.257 以降参照。
- 28) Federico Lozano Gutiérrez, *Historia de Ronda, Ronda*, 1905/2005, p.150.
- 29) Rachel Arié, *op.cit.*, p.333.
- 30) 詳細は、Haim Bienart, *Atlas of Medieval Jewish History*, Jerusalem, 1992, pp.57 以降、ならびに Martin Gilbert, *Alas de la Historia Judía*, Mexico, 1978, pp.45-47 参照。なお、これは膨大な資料集であるが、同じ著者にはスペイン語による概説もある。Haim Beinart, *Los conversos ante el Tribunal de la Inquisición*, Jerusalem, 1984.
- 31) たとえば、スペイン・ポルトガルにおける隠れユダヤ教徒については Martin Gilbert, *op.cit.*, p.49 参照のこと。なお、"marrano" とはスペイン語、ポルトガル語で使用され、スペイン語ではメキシコで豚を意味した。ポルトガルでは蔑称の表現でモーロ人（イスラム教徒）、ユダヤ教徒を指した。
- 32) ダンテ (Dante Alighieri, 1265-1321) の『神曲』 (*La Comedia Domina*) を引用するまでのことはなく、キリスト教カトリックでは最後の審判で死後、人間は天国、地獄以外に煉獄がある。煉獄はキリスト教を裏切った人々がいくところであり、彼らは魂の浄化を称して火刑 = 火あぶりが必要とされた。魔女や異端者に生きながらして火あぶりが待っていたのはそのためである。ちなみに、異端審問の結審の結果、すべての容疑者が火刑に処せられたわけではなく、無罪の人もいれば、コンポステーラ (Compostela de San Tiago) に巡礼を行かされ、改心を求められた場合もある。また、ジャンヌ・ダルク (Jenne d'Arc, 1412? -1431) も魔女として疑われたわけではなく、異端者として裁かれたのである。
- 33) その中でもコルドバは異端審問が際立っていたのか、写本を近世スペイン語で単著が刊行されている。Rafael Gracia Boix, *Colección para la Historia de la Inquisición de Córdoba*, Cordoba, 1982 また、クエンカも同様でこちらは概説である。

- Mercedes García-Arenal, *Inquisición y moriscos—Los procesos del Tribunal de Cuenca*, Madrid, 1978=1988(第3刷).
- 34) Mercedes García-Arenal, *op.cit.*, pp.26–27.
- 35) ゴヤの版画に衝撃を受けた論者はその当日、書店に直行し、ゴヤの版画を含めて異端審問の版画を探し、店主にも訊ねたがついに発見されなかった。
- 36) Rafael Gracia Boix, *op.cit.*, p.294.
- 37) *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, 1972, Vol.14, p.342.
- 38) トランシト教会 (Sinagoga del Transito) とサンタ・マリア・ラ・ブランカ教会 (Sinagoga de Santa Maria la Blanca). このうち、トランシト教会がユダヤ博物館 (Museo Sefardi) になっている。
- 39) *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, 1972, *op.cit.*, vol.8 pp.1382–1407.
- 40) Henry Kamen, *The Spanish Ubqyusution—a Historical Revision*, New York, 第3刷 =2014, p.396.
- 41) かつてスペインのことをユダヤ教徒たちはセファルドと呼んだ。そのことから、スペインに住むユダヤ教徒のことをセファルドと呼称するようになった。
- 42) *Encyclopaedia Judaica*, Jerusalem, 1972, *op.cit.*, vol.8 pp.1382–1407. なお、Auto-da-fé については, *ibid.*, vol.3 p.911.
- 43) たとえば, Haim Beinart, *Records of the Spanish Inquisition in Ciudad Real*, 4 Volumes, Jerusalem, 1974–1985 によると, Valladolid, Madrid, Segovia, Toledo, Dueñas, Zamora, Medina del Campo, Madrigal, Oca, Guada-lupe, Trojillo, Seville, Cordoba, Trujillo, Tordesillas, Alcalá de Henares, Palacios de Valduernas, Valencia, Jaén, Barcelona, Medina de Campo, Burgos の記録が近世スペイン語の資料が残されている。その全貌は紙面の関係でここではとくに触れない。
- 44) Marrano とはスペイン語ではもっぱらメキシコのスペイン語で用いられ、メキシコでは一般的に「豚」を意味する。それは戒律でユダヤ教徒もイスラム教徒も豚を食べないことに由来する。ポルトガルでもこの単語は使用されており、侮称として軽蔑してユダヤ教徒、イスラム教徒のことを指す。
- 45) 稀にモリスコと同じ意味でムデハル (mudéjar) と呼ばれた。本来はレコンキスタ後にキリスト教に改宗した元イスラム教徒たちが手掛けたイスラム風の建築様式をいう。Francisco Bethencourt, *The Inquisition—A Global History—1478–1834*, Cambridge, 2009, p.156, Mary E. Giles, *Women in the Inquisition—Spain and the New World*, London, 1999, pp.209–228, またはフェルディナンド・イワサキ著八重樫克彦・八重樫由貴子訳『ペルーの異端審問』(新評論, 2016) 参照。
- 46) Martin Gilbert, *op.cit.* p.47, Francusto Bethencourt, *op.cit.*, p.47, p.156, またはエルディナンド・イワサキ著八重樫克彦・八重樫由貴子訳, 前掲書参照。
- 47) もともと、ユダヤ教徒には正統派、伝統派、ハシミズム派。カバラ(神秘主義)派などがおり、ユダヤ教についての解釈もそれぞれ異なっていた。18世紀末から伝統に縛られたユダヤ教に対して批判的な人たちが出てきた。彼らは一般的に改革派と呼ばれた。「ユダヤ教徒である前にそれぞれの国の国民であれ」という考え方で、正統派や伝統派からはユダヤ教徒と見なされていないことも事実である。現在のイスラエルでも改革派のユダヤ教徒同士から生まれた子供はユダヤ教徒ではなく、イスラエル国民として認められていない。ここでは、便宜的に近代以降のユダヤ教徒はユダヤ人と呼称することにする。
- 48) Vicente Fidel López, *La novia del hereje o La inquisicion de Lima*, Buenos Aires, 1870, Kindle 版 =Bibli-oteca Nacional de España. リマ(現在のペルーの首都)はスペイン支配下の時代、スペインにとって南米の拠点であった。本書によれば、リマの異端審問は1578年から始まっている。異端審問を命じた本土のイサベル女王は中世ラテン語で《*rubicundum erat Judas*》(ユダヤ教徒はすぐ染まる)というのが口癖であった。これはユダヤ教の破棄 (Auto-da-fe) をおこなうときの陰口として有名である。Vicente Fidel López, *op.cit.*, Kindle 版 =Capitulo XI また、邦訳されたものに、フェルナンド・イワサキ著、八重樫克彦

- 彦・八重樫由貴子訳、前掲書に実際の異端審問の記録（その多くは写本である）が紹介されている。
- 49) ジャン・メイアール、猿谷要監修『奴隷と奴隷商人』、創元社、1992年、156頁、176頁。
- 50) Mary E. Giles, *op.cit.*, pp.229-253.
- 51) Francusco Bethencourt, *op.cit.*, p.374.
- 52) *ibid.*, p.378.
- 53) *ibid.*, pp.378-379.
- 54) たとえば、British Library, The Trustees of Museumなどに収められている。*ibid.*, p.385, p.398, pp.404, pp.411-414.
- 55) ポルトガル王朝（1640-1910）とブラジル帝国（1822-1899）がある。
- 56) 徳永恂・小岸昭著『インド・ユダヤ人の光と影』、新曜社、2005、51頁。
- 57) 前掲書、54頁。
- 58) 前掲書、58頁。
- 59) 前掲書、108頁。
- 60) 詳しくはフェルナンド・バエス著、八重樫克彦・八重樫由貴子訳『書物の破壊の世界史』、紀伊國屋書店、2019を参照のこと。
- 61) ギーについては、渡辺昌美『異端審問』講談社新書、1996、141頁以降（第5章）、池上俊一著『ヨーロッパ中世の宗教運動』、名古屋大学出版会、2007、144頁、Michel Roquebert, *op.cit.*, 1998.
- 62) フェルナンド・バエス著、八重樫克彦・八重樫由貴子訳前掲書、286-290頁。
- 63) フェルナンド・バエス著、八重樫克彦・八重樫由貴子訳前掲書、294-297頁。
- 64) フェルナンド・バエス著、八重樫克彦・八重樫由貴子訳前掲書、298頁。
- 65) フェルナンド・バエス著、八重樫克彦・八重樫由貴子訳前掲書、307頁、浜島敏著、『聖書翻訳の歴史—英訳聖書の歴史』、創言社、2003、168-179頁、浜島敏著、『聖書に命をかけた人々』、ヨルダン社、2001、49-61頁、ペンソン・ボブリック著、千葉喜久枝・大泉尚子訳『聖書英訳物語』、柏書房、2003、61頁-106頁。
- より専門的にはデヴィッド・ダニエル著、田川健三訳『ウィリアム・ティンダル—ある聖書翻訳者の生涯』、勁草書房、2001がある。それ
- にしても、ピューリタンの国になったイギリスはオクスフォード大学、ケンブリッジ大学の古典学、聖書学の碩学を集め、欽定語訳（*King James Authorized Bible*）の編集、完成させたことは余りにも有名であるが、そのときティンダルの英語訳を随所に使用したことが歴史の皮肉であった。
- 66) コルセアはもっぱらローマ教皇の船舶と教皇の忠実な下部のスペイン船を狙い、イングランドや当時同盟を結んでいたフランス船は狙わなかった。その様子はバルバリア海賊がイングランドに送った書簡からも明白である。J.F.P.Hopkins, *Letters From Barbary*, New York, 1982参照。また、海賊一般についてはAdrian Tinniswood, *Pirates of Barbary*, London, 1910が興味深い。
- 67) Miquel de Cervantes Saavedra, *Don Quixote de la Mancha*, Barcelona, 1950, p.447ならびにセルバンテス著永田寛定訳『ドン・キホーテ』、岩波書店、正編三、194頁。
- 68) Giorgio Vasari Pittote Arebtino, *Le Vite de Più Eccllienti Pittori Suptori*, Firenze, 1981, tome II, p.614、ヴァザーリ著、平川祐弘・小谷年司・田中英道訳、『ルネサンス画人伝』、白水社、第11刷=1983、94頁。
- 69) cf. Jean-Leon L'Africain, *Description de L'Afrique*, Paris, 1981あるいは、アミン マアルーフ著、服部伸六 訳『レオ・アフリカヌスの生涯』（リポレポート、1919）参照。
- 70) Paul Preston, *The Spanish Holocaust*, Norhamotnshire, 2012はその視点で書かれた膨大な史料に基づく研究である。とくにヒトラーとフランコの2人の総統の会談は関係者の事前成果とはいえ圧巻である。*Ibid.*, p.490.
- 71) 後にフランスとスペイン、スイスとスペインの間にTalgo特急が走るようになり、列車が2つのレールの車輪を切り替えてのることができるようになり、実現した。EU以前、Talgo特急だけは車内で国境検査ができた。もともと、Talgo特急は険しい山々の多いスペインの地形を生かした特急として開発された。一両が短く、振り子電車とも呼ばれ、揺れが少ない。
- 72) これについては20世紀末期、マドリードに住

- むギタリストの友人の（当時マドリードの公立中学生）の子息から直接聞いた話でもある。
- 73) Juan Ignacio Pulido Serrano, *La inquisición española: Más allá de la «Leyenda negra»* (Argumentos para el s. XXI nº 25) (Spanish Edition). 978-84-941642-3-1. Kindle 版, Apéndice I; Carta de Juan Pablo II sobre la Inquisición.
- 74) メアリー・パット・フィッシャー著、蓮池隆広訳『21世紀の宗教』（春秋社、2005）179-181頁。
- 75) ポグロムは、ロシア皇帝（ツァーあるいはツァーリ [царь]）のニコライ1世（Николай I, 在位 =1825-1855, 生没年 =1796-1855）によって始まった、ユダヤ人の弾圧政策である。2代後のアレキサンドル3世（Александр III=Александр Александрович Романов, 在位：1881-1894, 生没年：1845-1894）は先代のユダヤ人保護政策を取りやめ、「ロシア帝国内のユダヤ人の3分の1はロシアを離れ、3分の1は改宗し、あとは死ぬだろう」と言ったのは有名な言葉である。レオン・ポリアコフ著、菅野賢治・合田正人監訳、『反ユダヤ主義の歴史』、筑摩書房、2006、第IV巻（「自殺に向かうヨーロッパ」）、121頁-136頁、ウエルネル・ケラー著、迫川由和・天野洋子訳、『ディアスポラ』、山本書店、1982、下巻、212頁以降参照。または、S・エティンゲル著石田友雄訳『ユダヤ民族史』、六興出版、1978、第5巻（近世編・現代編I）ならびに同書の第6巻（現代編II）参照。
- 郎監修）、創元社。
- 小岸昭著（1992）。スペインを追われたユダヤ人—マツラーノの足跡を訪ねて、人文書館。
- エリー・ドゥリー（1995）。スペインのユダヤ人（関哲行・立石博隆・安前安子訳）、平凡社。
- Lu Ann Homza (2006). *The Spanish Inquisition 1478-1614: An Anthology of Sources*, Cambridge.
- Richard L Kagan & Abigail Dyer ed./tr. (2011). *Inquisitorial Inquiries—Brief Lives of Secret Jews & Other Heretics*, Baltimore.
- Alisa Meyuhay Ginio (1992). *Jews, Christians and Muslims in the Mediterranean World after 1492*, London: Portland.
- Haïm Harroun (1990). *Au Temps des Bûchers: Expulsion des Juifs d'Espagne (1492-1992)*, Aix-En Provence.
- Maruxa Duart Herrero (2016). *La Leyenda Isabel I de Castilla: Como se constuye un pensamiento*, Paris.
- The Encyclopedia of Islam, (CD-ROM=Windows Vesion), E.J.Brill.
- ジャン・メイエール（1992）。奴隷と奴隷商人（国領苑子訳）、創元社。

(2019.9.25 受稿, 2019.11.11 受理)

## 参考文献

- ヴァルフガング・ハルトウニング（2006）。中世の旅芸人（井本响二・鈴木麻衣子訳）、法政大学出版会。
- 上野健太郎（2000）。カルロス五世の旅、JTB出版販売。
- ジョセフ・ベレ（2002）。カール5世とハプスブルク帝国（塚本哲也監修）、創元社。
- アンヌ・ブルノン（2013）。カタリ派（池上俊一監修）、創元社。
- レオン・プレスィール（2012）。シトー会（杉崎泰一郎監修）、創元社。
- グザヴィエ・バラル・イ・アルテ（2013）。サンティアゴ・デ・コンポステーラと巡礼と道（杉崎泰一